

山と博物館

第46巻 第9号 2001年9月25日

市立大町山岳博物館



特集

大町山岳博物館 創立50周年 記念号



山博創立の精神に学ぶ

倉科 和夫

平成十三年、大町山岳博物館は創立五十周年の記念すべき節目を迎えた。

西に聳え立つ北アルプスの山容が美しい、ここ大町市に大町山岳博物館として産声を上げたのは一九五一年（昭和二十六）十一月一日のことである。これより前の昭和二十四年ころ、戦後の混乱期にあつて「地方に文化の興隆を」と町角に立つて街頭演説会を繰り返し世論を喚起し、町議会に働きかける熱血公民館青年部の姿があつたのである。これは疲弊しきった地域住民の心に一灯を燈し、やがては万灯の輝きとなつて議会を動かし、紆余曲折を経て、ついに結実を迎えた瞬間でもあつた。

開館時の様子については「大町山岳博物館建設記録」に次のように記されている。

「十一月一日の開館を明日に控えて作業は山積みしていた。しかし多くの住民や高校生の応援もあつて十一月一日の空が白くなる頃、ようやく開館作業も終わりに近づいていた。屋外の焚き火に集まる多くの顔は、創り出した喜びにはてて赤かった。」くしくも開館の翌月に博物館法が公布されたのであつた。

今振り返って、衣食に事欠く時代にあつて、青年たちの心をかくも大きく揺り動かし、一途に博物館建設に向かわせた原動力とは何であつたのか。その底流に流れていた地域の思想とは何であつたのか。創立五十周年を祝う意味は正しくここにあると考えている。

信濃の小さな町で起こった博物館建設運動は、当時としては極めてユニークな草の根運動であつた。これは文化の中央志向からの脱却を目指すものであり、今まで育み育ててきた地域固有の文化に新しい角度から光を当て、埋没している山岳文化を掘り起こし、真の地域文化の創造を願つてのことにはかならない。二十一世紀の幕開けという時代の転換期にあつて、山岳博物館は何を選択し、これから何を創造すべきか。創生期の先達の問題提起が、時代を超えて今あらためて鋭く問われているように思えてならない。

（大町山岳博物館館長）

特集 大町山岳博物館創立五十周年記念 「写真でつづる山博五十年」

大町山岳博物館

1、山岳博物館五十年の歩み

大町山岳博物館は一九五一年（昭和二六）十一月一日、大町に誕生しました。

戦後間もない時代にあつて、当時人口わずか一万七千人の山深い町に博物館をつくったことは、たいへんな快挙といえます。それから半世紀、山岳博物館は「さんぱく（山博）」の愛称で市民など多くのみなさんに親しまれていきます。

また、「山岳」をテーマにしたユニークな博物館として全国的に知られています。しかし、もうひとつ博物館をユニークにさせている点があります。それは博物館の「おいたち」です。

山岳博物館はいわゆる行政主導型で作った博物館ではなく、住民運動によって生み出されたものです。

戦後の混乱期に、地元の青年たちは文化、それも地方から発信する独自の地域文化を熱望しました。その燃え上がるような情熱は、やがて大町に博物館を設立するという現実的な目標を得ることになりました。

青年たちは熱心に博物館の必要性を住民に説きました。彼らの設立運動の波紋は住民全体に広がり、議会や町の行政を動かすまでにまりました。その後、資料の収集や調査・研究に多くの住民や学生が献身的に働きました。

そして一九五一年、市民の手による博物館がついに誕生したのです。

その年はくしくも博物館法が公布された年のことで、全国的にみても大町山岳博物館は長い歴史を持つ博物館のひとつといえます。

「木造校舎のぬくもり」

開館から五年が経ち、展示資料や調査・研究活動も充実してきた博物館は、施設を拡げる必要が生じてきました。そこで一九五六年（昭和三一）十一月、大町南高校（現大町高校）の校舎を大町公園へ移築。翌年八月に開館しました。

校舎として使われていた建物は、歩くと床がきしむような「お古」でしたが、訪れたみなさんにとっては、学窓時代を思い出させる建物だったのではないのでしょうか。

この二代目博物館は、木造校舎のぬくもりと独特の印象を来館者にあたえたようです。今でも博物館を訪れる方に「以前来たときは木の建物だったのだけど」と聞かれることがあります。

一九八二年（昭和五七）に現在のレンガ壁模様の新館が完成しました。建物は木造から鉄筋コンクリートへと姿を変え、館内の展示もその後数回の展示替えを行っています。しかし、博物館から眺める山並みの美しさ

は少しも変わっていません。北アルプス・街・田園がおりなす風景は絶景で、まさに「大町市の宝」です。

「山博を訪れた人びと」

開館以来、博物館には国内外の各界からさまざまな方が訪れています。一九六一年（昭和三六）三月

月二十七日、皇太子殿下（現天皇陛下）が来館され、館内の展示やカモシカの「岳子」を親しくご覧になられました。

一九六五年（昭和四〇）には、当時日本山岳会会長の松方三郎氏を招いて「講演と山岳映画の夕べ」を開催しました。これは、山に関する優秀な研究や活動などに贈られる「秩父宮記念学術賞」を山岳博物館が受賞したのを記念してのことでした。

また、平成三年四月十八日には、アイガー北壁世界初登攀者のひとりであるドイツ人登山家アンドリュース・ヘックマイヤー氏が来館。また、世界初アルプス三大北壁冬期単独登攀に成功した登山家の長谷川恒男氏もこのとき



「初代山岳博物館」 昭和26年

独自の地域文化を熱望した青年たちと多くの住民の力によって、大町山岳博物館は誕生しました。

一緒に来館しています。

さらに、同年十一月十三日には、世界最高峰のチョモランマ（英名エベレスト）に初登頂したエドモンド・ヒラリー卿が来館。このときにヒラリー卿が残したサインが、今でも展示室のどこかにありますので、博物館にいらしたときにぜひ探してみてください。



「展示室のようす」 昭和31年ころ

博物館の展示室は、山の行き帰りに立ち寄る登山者などで盛況です。展示解説も手書きでした。



「開館式のようす」 昭和26年

11月1日、博物館が開館。同年、博物館法が公布され、全国にも博物館建設の動きが広まりました。



「居谷里湿原総合学術調査」 昭和31年

この調査には博物館の職員ら、延べ600人以上が携わり、2600点余りの資料を収集しました。



「信濃大町駅前水禽舎のオオハクチョウ」 昭和26年

博物館が開館すると、駅前にあった水禽舎が付属施設となり、保護されたハクチョウを飼育しました。



「第1回山の自然科学教室」(全10回)昭和32年

自然に親しむ機会の少ない都内の中学生を対象にしたこの会は、後年も行われて好評を得ました。



「2代目山岳博物館」 昭和32年

大町南高(現大町高)の校舎を大町公園に移築して、念願であった新館建設を実現しました。



「エドモンド・ヒラリー卿が来館」 平成3年

世界最高峰チョモランマ(英名エベレスト)初登頂者のエドモンド・ヒラリー卿が展示を見学しました。



「3代目博物館落成式」 昭和57年

多くの関係者が参加して行った落成式。新館の入口前には、カモシカ親子のブロンズ像が建ちました。

2、カモシカとライチョウ

大町山岳博物館は、創立当時から北アルプスと山麓に住む動物を飼育展示しています。

なかでもライチョウとニホンカモシカは、氷河期を生きぬいた「遺残動物」であり、特別天然記念物にも指定されている貴重な動物です。

しかし、五十年ほど前まではそれらの生態について未知の部分が多く、詳しい調査・研究は行われていませんでした。

博物館ではそうした謎を解き明かすべく、ライチョウとニホンカモシカの増殖研究や野外調査を、これまで画期的に進めてきています。

「アルペン動物園との交流」

一九八五年（昭和六〇）二月十八日、大町市とオーストリア共和国のインスブルック市が友好都市提携を結びました。それと同時に、山岳博物館とインスブルック市のアルペン動物園が友好提携を結びました。博物館と動物園を結びつけたきっかけは、北アルプスとヨーロッパアルプスの動物たちでした。一九八四年（昭和五九）、博物館のカモシカがオーストリアへ贈られると、アルペン動物園からはアルプスマーモットが贈られることとなり、一九八五年四月二七日に付属園へ入園。その愛らしい姿から、子どもたちの人気者となりました。

その後もアルペン動物園との動物交換は続き、ヨーロッパオオライチョウ、シヤマア、シベリアオオヤマネコといったヨーロッパの珍しい動物たちが博物館付属園の一員となりました。



「人工哺育第1号のカモシカ「大助」 昭和40年
付属園で受け入れたカモシカの幼獣「大助」に、博物館では初めてとなる人工哺育を行いました。



「カモシカの岳子」 昭和31年
保護されて付属園の飼育カモシカ第1号となった「岳子」。博物館の顔として長年親しまれました。



「中国へ贈られるカモシカ」 昭和47年
日中国交回復を記念して中国からパンダ、日本からは山博のカモシカ「太郎」「辰子」が贈られました。



「カモシカ初繁殖」 昭和45年
左よりカモシカ「あつ子」「太郎」「大助」。太郎は国内のカモシカ繁殖例の第1号と認定されました。



「ライチョウ移殖へ協力」 昭和35年
日本鳥学会と林野庁が主体となり行った白馬岳から富士山へのライチョウ移殖に博物館が協力しました。



「アルペン動物園との友好提携」 昭和60年
大町市とインスブルック市が友好都市提携をし、同時に山博とアルペン動物園も友好提携を結びました。

3、博物館と友の会

博物館創設から二年後の一九五三年（昭和二八）、博物館をとりまく人たちの手によって「博物館研究会」が発足しました。これは会員各自の研修とともに「十年後の文化活動を支えるような、後続の若い芽を育



「冬の鈴ヶ岳ライチョウ調査」 昭和38年
昭和36年に未調査だった冬期間のライチョウ調査を、3月から4月まで鈴ヶ岳で行いました。

てよう」という目標を掲げてのことでした。その後、「研究会」は「博物館友の会」と名称を改め、再出発しました。博物館五十周年を迎えた現在、友の会はより一層充実した活動を展開しています。

「山岳博物館友の会活動」

山岳博物館友の会は、大町山岳博物館の外郭団体として、博物館との共催行事なども含め、自然観察会や登山などを行っています。会員数は、個人会員一一一名、ファミリー会員一五九家族（平成十二年度末現在）で、



「春のライチョウ調査」 昭和36年
鈴ヶ岳でライチョウの生態調査を、5月から10月まで連続150日にわたって行いました。



「ライチョウ飼育のようす」 昭和51年
昭和38年よりライチョウ低地飼育が博物館で開始され、現在では繁殖技術をほぼ確立させました。



「ライチョウ会議」 平成12年
「ライチョウをトキの二の舞にはならない」と、大町市が全国に呼びかけて発足した会議です。

市内はもとより全国から数多く入会しています。毎年恒例となっている主な行事は次のとおりです。

- ▽「小鳥の声を聞く会」
五月、愛鳥週間に合わせての探鳥会。博物館から鷹狩山頂上まで講師と一緒に歩き、野鳥の声や姿を観察します。
- ▽「山博動物園の一夜」
八月の夏休み中、博物館の近くにある野外施設「山の子村」でキャンプ泊をしながら、夜の博物館付属園を巡って動物たちを観察する「ナイトハイク」などを行います。
- ▽「歩くスキーの会」
冬に、クロスカントリースキーをはき、雪が降り積もった森や林の中を自由に歩き回ります。雪上に残された動物の足跡や、春を待つ木々なども同時に観察します。

「博物館友の会会員を募集しています」

●友の会とは…

友の会は、自然や文化に関心を持つ人たちの集まりです。会員相互の知識の向上を図るとともに、山岳博物館の各種事業に協力することを目的としています。

●入会すると…

▽会員証の提示により博物館に無料で入館できます。

▽博物館の機関誌『山と博物館』（月刊）・友の会の会誌『ゆきつばき』（年刊）・会報『ゆきつばき通信』などを送ります。

▽友の会の主催・共催するイベントに参加できます。

▽友の会オリジナル・バッジ（四五〇円）を購入できます。

▽心がいつも北アルプスにつながります。

●入会方法は…

随時入会を受け付けます。博物館窓口にて直接申し込むか、申込用紙を事務局に請求し、必要事項を記入の上送ってください。入金を確認次第、会員証などを送ります。

■年会費

個人会員 三五〇〇円

ファミリー会員 四〇〇〇円

（賛助会員についてはお問合わせください）

■郵便振替

口座番号 〇〇五五〇・二・二四一九四

加入者氏名 山博友の会

■問合わせ先

〒三九八—〇〇〇二

長野県大町市大字大町八〇五六一

大町山岳博物館内 山博友の会事務局

電話／FAX 〇二六一—三三六三三四



「博物館研究会の八方尾根研究登山」昭和30年
会員各自の研修と地域文化を支える後継者育成を目的として
180名の会員で「博物館研究会」が発足。



「友の会シンボルマーク」



「チョモランマ BC トレッキング隊」平成12年
博物館創立50周年を記念し、友の会ではチョモランマのベース
キャンプへ調査トレッキング隊を派遣。



「小鳥の声を聞く会」(居谷里湿原) 昭和34年
「博物館研究会」は「博物館友の会」へと改名され、心機一転
あらたな活動が開始されました。



「動物園の一夜」(平成11年開催時のようす)
子どもたちが夏休みの間、テントに泊まりながら昆虫観察や付
属園のナイトツアーなどを行います。



「小鳥の声を聞く会」(平成12年開催時のようす)
早朝に博物館前を出発し、野鳥のさえずりを楽しみながら鷹狩
山山頂へ。山頂で食べる朝食は格別です。



「歩くスキーの会」(平成13年開催時のようす)
雪の積もった野山を自由に歩けるクロカン。ゲレンデスキーと
は一味違った楽しみがあります。



「キノコ学習会」(平成10年度開催時のようす)
秋、野山にキノコが顔を出すころ、講師を招いてキノコやキノ
コの育つ環境について学習します。

4、博物館と二十一世紀

大町山岳博物館では、創設時から「自然を知り、自然と親しむことによって、自然を守り育てる」という自然保護の理念を掲げ、現在も地域の自然や文化の保護、将来の地域発展につながる活動を行っています。

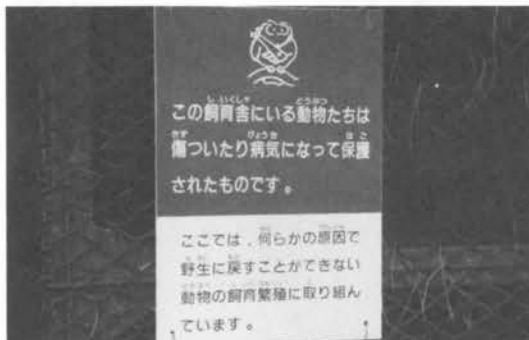
平成十二年、博物館が事務局となつて発足した「ライチョウ会議」は、ライチョウの研究者や団体が、はじめて一堂に会した会議でした。今後、こうしたネットワークにおいて、長年の低地飼育の研究を活かしてどのような役割を果たしていくかが課題です。

「展示が替わります」

大町山岳博物館では今年（平成十三）十二月から来年三月にかけて展示の改修を行う予定です。今の博物館は一九八二年（昭和五七）の移転・開館から二十年、平成五年の展示改修から十年近くが経過しました。現在、「参加・体験型」の手法を多く用いた展示が普及するなかで、山岳博物館では従来の「見学型」展示となつていて、時代の潮流に合っていない。

そのため、博物館の来館者や利用者を十分に満足させるために、平成五年の展示改修で大幅に模様替えできなかった二階の第二展示室を中心に行います。

平成十四年度からは小・中学校で「総合的な学習の時間（総合学習）」が新設、週休二日制も完全実施されます。これに対応するためにも、博物館では子ども向けの展示や、学校の授業でも利用可能な展示を目指しています。



「野生動物の救護活動」

博物館では傷ついたり、病気になった野生動物を救護し、野生復帰するまで動物たちを保護しています。



「唐松岳での植生復元作業・調査」 平成11年

荒廃が進むライチョウの生息域の植生調査を通じ、復元事業などの保全活動を進めています。



「教育普及活動」

平成十四年度からの「総合学習」や「週休2日制」に対応し、小・中学校との学習協力を一層進めます。



「山岳資料の収集・保存」

平成12年にスイスアルプス博物館（東京）から資料の寄贈を受け、さらに山岳資料が充実しました。



「ふれてみよう！ 一触れるはく製」

第2展示室入口に、触れるはく製を展示しています。手でふれることで動物の毛並みなどを体感できます。



「現在の第2展示室（2階）」

2階の第2展示室では「山岳の自然」をテーマにカモシカやライチョウについて展示しています。

「大町山岳博物館五十年の歩み——略年表——」

西暦年	年号年	山博の主なできごと	西暦年	国内外の主なできごと
一九四七	昭和二二	山博の主なできごと	一九四七	国内法の制定
一九四八	昭和二三	五月、町立大町図書館が公民館として発足（一志茂樹先生が講演）	一九四八	六三制教育実施
一九四九	昭和二四	十月、公民館構想で郷土部設置を発表	一九四九	新制大学発足
一九五〇	昭和二五	十一月、高瀬川でオオハクチョウ保護（大町駅前には水禽舎設置）	一九五〇	サンフランシスコ講和条約締結
一九五一	昭和二六	十一月、博物館開館（初代）	一九五一	十二月、博物館法公布
一九五二	昭和二七	八月、博物館法に基づく博物館として登録	一九五二	英登山隊、チョモランマ登頂に成功
一九五三	昭和二八	七月、博物館研究会発足（会員一八〇名）	一九五三	七月、大町に市制施行
一九五四	昭和二九	二月、カモシカ初保護（「岳子」と命名）	一九五四	テレビ放送開始
一九五五	昭和三〇	同月、機関誌「やまと博物館」創刊（のちに「山と博物館」と改称）	一九五五	日ソ国交回復
一九五六	昭和三一	四月、居谷里温泉総合学術調査に協力（昭和四六年、居谷里温泉は長野県天然記念物に指定）	一九五六	国連に加盟
一九五七	昭和三二	五月、黒部川上流域雨量調査に協力（黒四ダム建設にともなう）	一九五七	八月、大糸線全通
一九五八	昭和三三	七月、第一回山の自然科学教室開催（以後、全十回開催）	一九五八	南極観測隊、昭和基地に上陸
一九五九	昭和三四	八月、大町公園へ博物館移転・開館（二代目）	一九五九	米、人工衛星打ち上げ成功
一九六〇	昭和三五	四月、針ノ木岳調査（針ノ木自然園開設に向けて）	一九六〇	ソ連、宇宙ロケット打ち上げ成功
一九六一	昭和三六	博物館研究会が博物館友の会と改称し発足	一九六一	日米安保条約改正反対運動
一九六二	昭和三七	八月、富士山へのライチョウ放鳥に協力	一九六二	カラーテレビ本放送開始
一九六三	昭和三八	コマクサ低地栽培・研究開始	一九六三	小児マヒ流行
一九六四	昭和三九	五月、ライチョウ調査（爺ヶ岳）	一九六四	ソ連、有人ロケットに成功
一九六五	昭和四〇	十一月、創立十周年記念式典開催	一九六五	米、ケネディ大統領暗殺
一九六六	昭和四一	木崎湖畔に「白鳥の池」設置（コバクチョウを移入・飼育）	一九六六	八月、黒四ダム一般開放
一九六七	昭和四二	三月、冬期ライチョウ調査（爺ヶ岳）	一九六七	東京オリンピック開催
一九六八	昭和四三	七月、爺ヶ岳に移動ライチョウ舎設置	一九六八	日韓国交回復
一九六九	昭和四四	三月、秩父宮記念学術賞受賞	一九六九	中国、水爆実験
一九七〇	昭和四五	六月、保護カモシカ「大助」の人工哺育に成功	一九七〇	米、アポロ月面着陸
一九七一	昭和四六	三月、「特別天然記念物ライチョウ」完成（同年のアジア映画祭でグランプリ受賞）	一九七一	万国博覧会開催
一九七二	昭和四七	六月、飼育ライチョウの自然抱卵によるふ化成功（日本初）	一九七二	中国、国連に加盟
一九七三	昭和四八	五月、飼育カモシカ初繁殖成功（「太郎」と命名）	一九七三	石油ショック、ベトナム和平
一九七四	昭和四九	七月、扇沢カモシカ園でカモシカ展示飼育	一九七四	日中平和友好条約成立
一九七五	昭和五〇	八月、「博物館友の会」再発足	一九七五	成田空港開業
一九七六	昭和五一	高瀬川流域自然総合追跡調査（高瀬川電源開発にともなう）	一九七六	フォークランド紛争勃発
一九七七	昭和五二	六月、新館完成（三代目）	一九七七	十月、大町ダム竣工
一九七八	昭和五三	二月、オーストリアへカモシカ贈呈	一九七八	米ソ首脳会議（戦略兵器五〇％削減で合意）
一九七九	昭和五四	同月、アルペン動物園と友好提携（同時に大町市とインスブルック市が友好提携）	一九七九	湾岸戦争（前年にイラク軍、クウェート侵攻）
一九八〇	昭和五五	十一月、創立四十周年記念式典開催	一九八〇	欧州連合（EU）条約発効
一九八一	昭和五六	二月、展示改修	一九八一	イスラエル、パレスチナ暫定自治始動
一九八二	昭和五七	五月、付属園内のコマクサ園整備	一九八二	十月、国営アルプスあづみの公園起工
一九八三	昭和五八	七月、喫茶店こまぐさ営業開始（友の会による運営）	一九八三	長野冬季オリンピック開催
一九八四	昭和五九	七月、八木山動物園（仙台市）よりスワシ移入（フリーディング・ローンによる繁殖のため）	一九八四	二〇〇〇年（Y2K）問題
一九八五	昭和六〇	二月、公式ホームページ開設	一九八五	情報技術（IT）基本法成立
一九八六	昭和六一	八月、唐松岳の植生復元調査開始（ライチョウ保護事業の一環）	一九八六	韓国・北朝鮮、南北首脳会議
一九八七	昭和六二	八月、大町市が呼びかけ「ライチョウの会」発足	一九八七	四月、独立行政法人制度導入
一九八八	昭和六三	八月、大町市で第二回ライチョウ会議開催	一九八八	米、同時多発テロ発生
一九八九	昭和六四	十月、創立五十周年記念式典開催	一九八九	
一九九〇	昭和六五		一九九〇	
一九九一	昭和六六		一九九一	
一九九二	昭和六七		一九九二	
一九九三	昭和六八		一九九三	
一九九四	昭和六九		一九九四	
一九九五	昭和七〇		一九九五	
一九九六	昭和七一		一九九六	
一九九七	昭和七二		一九九七	
一九九八	昭和七三		一九九八	
一九九九	昭和七四		一九九九	
二〇〇〇	昭和七五		二〇〇〇	
二〇〇一	平成一三		二〇〇一	

お知らせ

■大町山岳博物館創立五十周年記念特別企画

▽「斎藤 清の世界展」 十月十四日（日）まで
▽「日本山岳写真協会松本支部展」
「北アルプス・山のたより」

十月二十一日（日）～十二月一日（日）

いずれの企画展とも

開館 午前九時～午後五時（入場午後四時三十分まで）

会場 市立大町山岳博物館ホール、第一・二展示室

入場料 大人四〇〇円 高校三〇〇円 小中二〇〇円

（三〇名以上の団体は各五〇円割引）

無料・割引について

①市内に住む六五歳以上の方

（受付で運転免許証等を提示し、記名願います）

②市内に住む小学生（受付で記名願います）

身体障害者手帳・療育手帳をお持ちの方

大人三〇〇円 高校生二〇〇円 小中生無料

（受付にて手帳を提示願います）

その他、割引券をお持ちの方は受付へおたずねください

■大町山岳博物館創立五十周年記念出版

▽「新・北アルプス博物誌」 十月刊行

（大町山岳博物館・信濃毎日新聞社刊）

▽ブルーガイド旅読本

「上高地 安曇野 輝ける大地の自然と人」

（大町山岳博物館・実業之日本社刊）

平成十四年四月刊行

問合せ先

市立大町山岳博物館 〒三九八-〇〇〇二

長野県大町市大字大町八〇五六-一

TEL 〇二六-二二二〇二一

FAX 〇二六-二二二〇二二

URL <http://www.nics.ne.jp/sanpaku/alpine.htm>

山と博物館第46巻第9号

発行 千原 長野県大町市大字大町八〇五六-一

市立大町山岳博物館

TEL 〇二六-二二二〇二一

FAX 〇二六-二二二〇二二

印刷 大系タイムス印刷部

定価 一、五〇〇円（送料共）（切手不可）

郵便振替口座番号 〇五四〇七二一三三三